

第6章 対局意識

第1節 対局意識とは

対局意識とは、対局時にどのような考え方で対局すべきかという意識のことです。

対局意識は、格言に似ていますが、格言が部分的な戦いでの考え方であるのに対して、対局意識は全局的な戦いの考え方であるといえます。

1 対局意識の重要性

対局における構想や着手では、対局意識による価値観が無意識に影響を与えます。このため、対局意識を正しく理解することで、「ミスが減る」「形勢が有利になる」などの、よい効果がもたらされます。

またさらに、

- ① 囲碁とはどのようなゲームであるのか。
- ② 囲碁理論とは何か。

ということも、自然と理解できるようになります。

参考：対局意識の理解には、「9つの特性」、「着手価値」、「着手効率」などの囲碁理論の基本知識が役立ちます。

4つの重要意識

対局意識は、「攻めるという意識」が基本になります。相手の手に対して受ける手、守る手は効率が悪く、上達も困難になるといえます。

意識1 攻めながら守る

囲碁の着手は、「攻めながら守る」工夫と考え方によって棋力差が生まれ、「攻める」ことの技術習得が可能になります。特に、「絡み攻め」に関する意識は、置碁だけでなく互先の碁でも通用する意識といえます。

意識2 絡み攻めを狙う

単純に「地を囲う」、「石を取る」ことでは勝てません。勝負どころでは、絡み攻めになることが多くあり、その有無を検証し、用心することが必要になります。

意識3 中央の戦いを重視する

戦いの最大争点は、中央天元で起こりやすく、周囲の石の配置が大きく影響します。また天元での戦いは、もっとも難解であるため、有利不利の効果も大きくなります。

意識4 勝負手を意識する

勝負手の有無や有効性は、ゲームとしての最大争点であり、いつも勝負手を意識し、形勢不利な場合には、できるだけ早い時期にタイミングよく打ち、有利な場合には、相手に打たせないことが重要になります。

2 勝つための意識

(1) 勝負に勝ちたいという思い

勝つ能力を得るには、「正しい手を打ちたい」、「強くなりたい」という意欲だけでなく、「勝負に勝ちたい」という強い思いも重要になり、この「勝負に勝ちたい」という思いによって、相手に手抜きさせないなど、さまざまな工夫とテクニックが身に付くからです。具体的には、「勝負所のタイミング」「絡み攻めを狙う」、「必然のある手を打つ」などの意識が芽生えます。そして、新しい手段や可能性を見つけるきっかけとなり、窮地での発想転換にも役立ち、難解な場面での適応能力、集中力が養われることとなります。

(2) 最善手のみを追求する意識の問題点

「最善手はどれか」という追求は、答えがわかっている問題によって、読みの能力を高める練習では重要ですが、対局中に「どの手が最善手か」を追求し過ぎると、限られた持ち時間内であるため、打ち過ぎや勝負所でのミスが生まれやすくなります。また、部分的な最善にとらわれ、どうしても打ち過ぎの手や難解な手が多くなります。そのため、場合によっては「相手に手を渡し、見合いにする」という柔軟な手に気づき難くなります。

(3) 棋力の一時低下現象

右に記載した10の対局意識の手は、特に優先すべき考え方になります。この新しい意識で打ちだすと、今までの感覚や経験との不一致から、一時的に勝てなくなることがあります。これは、「定石を覚えて2目弱くなり」という事象と似ていて、打つ手が厳しくなったり、複雑になることから生じています。この結果失敗が多くなるのです。ただし、これらの失敗は、対局意識を続けることで、徐々に正確な読みが鍛えられ、自然に解消されます。

対局意識とは

構想や戦略に大きく影響し、囲碁理論の法則から導かれる。

そして戦いに強くなる効果がある。

- ① 攻めながら守る。
- ② 切断されても、大丈夫と思わない。
- ③ 相手の構想を制約する。
- ④ 着手ミスは、咎めないと悪手にはならない。
- ⑤ 敗着の原因はすべて、自分の着手ミスにある。
- ⑥ 急な人為確定でなく、緩やかな自然確定を目指す。
- ⑦ 相手の動きにあわせて、自分の構想を微調整する。
- ⑧ 相手の理想形は、絶対に阻止する。
- ⑨ 弱い石は、逃げるより捨てることを優先する。
- ⑩ 攻めてきた強い石とは、戦わない。

(4) 「攻めながら守る」という意識が基本になる

「勝率を上げる」には、優勢な碁を「勝ちきる」ことが必要です。そのために、「着手ミスを減らす」ことが必要になります。

このためには、単に守る意識ではなく、「攻めながら守る」という意識が上達にとって効果があります。

この意識はやがて「相手の構想を制約し、形勢を優位にする」という意識に発展し、「中央の戦いを重視する」ことによって、戦いに強くなる力を獲得するきっかけになります。

3 棋力で変わる「対局意識」

対局意識と棋力とは連動し、どのような意識で対局しているかで、棋力がわかるほど、密接な関係があります。また構想力にもっとも影響するのも「対局意識」になります。

(1) 基本となる対局意識

対局意識でも、基本となる意識は

- ① 攻めながら守る
- ② 相手の構想阻止を優先する
- ③ 相手の手に反発する

という3つの意識になります。

(2) 棋力の評価

棋力の評価では、

その1 自分の石が取られる不安があると、十分に戦えない

このことを理解するには、

法則 着手ミスをしないう限り、石は絶対に取られない。

ということを学ぶ必要があります。

その2 強い人ほど、相手の構想を制約する力が大きい

- ① 相手の地を阻止できる能力が大きい。
- ② 相手を生き難くさせる力が大きい

になります。自由度が大きいほど「地になる効率」が良くなります。

その3 強い人ほど、候補手の数が多い。

棋力が高い人ほど、選択できる候補手が多くなります。手抜きの可能性への考慮もされ、中央における戦いに重点が置かれるようになります。

棋力で変わる対局意識

対局意識は、

- ① 対局中に失敗しない知識、
- ② 勝つための知識、
- ③ 上達の知識へと変化します。

対局意識として

- ① 自分の構想実現より、相手の構想を阻止する。
- ② 相手を攻めながら守る。
- ③ 相手の生きを制限する。
- ④ 相手の地を制限する。

ことで「地の可能性を保持する」「自分の生きを容易にする」
「地の確定率を高める」などの目的が効率的に達成されます。

棋力で変わる対局意識の違い

棋力	対局意識	理由	(入門)
1	石を取ることを競う。	取る手は大きい。	↓
2	地を囲うことを競う。	地は大きく囲う。	
3	死活の能力を競う。	取られる危険がある。	
4	攻める効率を競う。	攻められると負ける	
5	捨石の効率を競う	要石とカス石がある。	
6	着手効率を競う。	着手価値に違いがある。	
7	ヨセの能力を競う。	先手の権利を獲得する。	
8	勝負手を競う。	勝負に勝つための	
9	強弱バランスを競う。	石の働きが効率差になる。	
10	構想力を競う。	構想力が効率差になる。(高段)	